

1. 各務原市のかかみがはら寺子屋事業 2.0 について

(1) 経過

- 平成 26 年度、市長の強いリーダーシップで「各務原寺子屋事業」が、
①地域で活躍できる人材の育成 ②郷土愛を持った子どもの育成の2点を目的としてスタートした。
- 平成 28 年度から、以下の4点をコンセプトとして「**かかみがはら寺子屋事業 2.0**」としてリニューアルした。



地域資源を十分に活用し、地域市民とともに作り上げる事業、結果として、寺子屋事業を通じて地域全体が子どもたちと一緒に成長し、地域の絆が強まっていくことを目標としている。

(2) 概要

• 4つのコンセプト

- ①未来を担う子どもたちに夢や目標をもって成長してほしい。
- ②郷土への誇りをもって成長してほしい。
- ③基礎的な学力をしっかりと持って成長してほしい、
- ④体験活動を通じて豊かな心を養ってほしい。

• 5つの柱

①基礎学力定着事業

- 小学生…3年生を中心に17の小学校区ごとに、週1～2回、45分間、放課後に実施。
地域の人が指導。特別教室や公民館などで実施。基礎基本定着問題集を活用。
平成 29 年度 539 人 (8,500 人の 6.3%) が登録
- 中学生…全学年が対象で、塾に行っていない生徒の中の希望者。
市内 6 か所で年間 40 回開催。基礎基本定着問題集や教科書を活用。
教員OBや教員志望の大学生が指導。
平成 29 年度 144 人 (4,200 人の 3.4%) が登録。

②福祉体験学習事業

小学校区学年を対象に、障害者・高齢者との交流や、福祉現場の体験で思いやりの心を育み、地域福祉への関心を高めることを目標にしている。

- 障害者施設学習コース

- ・高齢者施設学習コース

※平成 29 年度から、中学生を対象にした職業観をはぐくむコースを新設。

③ふるさと歴史発見事業

児童。生徒の郷土に対する愛着やほこりを醸成する目的で、史跡。文化財などの見学や各種体験講座を開催している。

例…歌舞伎の化粧「隈取」を親子で体験。市内各務おがせ町の村国座の協力。

④ものづくり人材育成事業

- ・各務原ものづくり見学事業

小学校高学年と中学生を対象に、市内ものづくり企業を見学することにより、市内の優れた企業を知り、産業を知り、夢や目標をもって成長するきっかけづくりを目的とする。

◇小学生…各務原市の産業を支えるものづくり現場を紹介し、経営者の思いを伝えることで、地域への郷土愛やほこりを醸成し、時代を担う人材の育成を図ることを目的に、企業の協力を得ながら実施している。

生活産業コース、木材産業コース、航空機産業コース、自然・健康産業コース、自動車産業コースなど、一日かけてバスで巡る。

◇中学生…中学生は具体的に将来を見据え始める時期であるため、企業説明や工場見学の時間を増やすことで、働くことのやりがいを感じてもらい、職業観を育むとともに、各務原市で働くということ視野に入れてもらうことを期待している。

航空機産業コース、テクノプラザコースを、一日かけてめぐる。

- ・航空機人材育成事業

小中学生を対象に、航空機の設計から製造までを学べる模擬体験プログラムや、実機の指導体験、航空機の整備現場見学などを実施している。

⑤地域ふれあい事業

- ・子ども起業家育成講座事業

小学生が社会の仕組みを学び、仲間との協調性や提案力などを養うため、商品の開発・宣伝、お店の運営など「起業」を疑似経験できる講座を開催。

- ・レッツ トライ イングリッシュ事業

歌やゲームなど英語を使ったコミュニケーション活動を通じて、児童生徒の英語を学ぶ意欲を高める。

- ・放課後子ども教室

地域の教育力を活用して、放課後に子どもと地域の大人が遊びや活動を通してふれあいの場を持つことで、たくましい子どもを社会全体で育む。

- ・夏休み子ども講座

地域の大人たちが、生涯学習で学んだ知識や技術を、地域の子どもたちに伝えるクラブ・サークルによる「学びの社会還元」のひとつ。

(3) 感想

福生市も取り組んでいるコミュニティスクールが学校と地域との連携を図って、学校教育を充実させていこうとするのに対して、かかみがはら寺子屋事業は、企業や事業者をも巻き込んで、市全体の総力を挙げ、子どもたちに夢や目標、そして郷土愛を育み、さらに地域の絆と振興をも図ろうとするもので、とても大がかりな仕掛けと感じた。コミュニティスクールは、自治体としては、主に教育委員会が中心となって取り組んでいくが、かかみがはら寺子屋事業は、庁内を横断するような横ぐしを入れての全庁的な取り組みであり、さらに学校だけでなく、民間企業や地域ボランティアなど、様々な方々の協力をえて、全市的な取り組みを構想している点で注目に値すると感じた。

本格的な実施から、まだ2年ほどであり、これからどのように発展し、成果を上げていくか、また、課題を乗り越えていくか、引き続き注視していきたい。

※岐阜かかみがはら航空宇宙博物館

平成8年に、各務原市単独の事業としてスタートしたが、平成30年から岐阜県との共同出資による公益財団法人によって運営されている。12,192㎡の広大な敷地に本館、付属棟、駐車場をもち、航空と宇宙の両方がある本格的な専門博物館としては国内唯一である。

43機（実機34、模型9）を展示し、かかみがはら寺子屋事業2.0とも連携して、キャリアデザイン教育、ものづくり体験教室などで活用している。



2. 岐阜市の子ども司書講座及び小さな司書のラジオ局について

(1) 経過

子ども司書養成講座は、子どもたちが図書館で働く人の仕事について学び、読書の素晴らしさを友達や家族に伝えられるように、「本と人をつなぐリーダー」になること、そして、将来、「子ども司書」の子どもたちが、図書館司書や地域の読書ボランティアとして活躍するなど、次世代の読書リーダーを目指すことを目的としている。2009年に福島県矢祭町で始まり、全国に広がった。

岐阜市では市内の小中学生を対象に、「みんなの森メディアコスモス」が開館した2015年に1期生の募集（各20人）を始め、80人の応募があった。東海学院大学のアンドリューデュアー教授（子ども司書推進プロジェクト代表、家読推進プロジェクト理事）が指導している。小学校4年生から中学3年生までを対象に毎年20人を募集しているが、約4倍の競争率のなか、抽選で決めている。

(2) 概要

岐阜市の「子ども司書養成講座」については詳しく聞けなかったが、高知県香美市の例によると下記のとおりである。

講座の内容

基礎研修(8月) 読書活動に役立つ知識を学ぶ。
11 単位取得。1 単位が 50 分で、2 日間実施。

実技・実地研修(8月から11月)

図書館司書の仕事について学ぶ。

8 単位取得。1 単位が 3 時間で、延べ 4 日間実施。

専門研修(12月) 子どもの読書の法律や図書館の役割、日本十進分類法による本の分類と整理の仕方など、専門的なことについて学ぶ。3 単位取得。1 単位が 1 時間で、1 日実施。



講師のアンドリュー・デュアー教授の指導を受けてレファレンスサービスの実習をする児童

レポートの内容

1. テーマ「子ども司書の役割」
2. 自分の意見や考えを 1000 字程度にまとめて提出します。
3. 5 段階評定中、「3」以上の成績を修めると合格。

※ 小さな司書のラジオ局

てにておラジオは市民が創る市民ラジオ局。FM わっちと連携して市民へ様々な情報を届けている。みんなの森メディアコスモスで毎週第 2、第 4 日曜日に公開録音をしている。

「子ども司書」たちも、このてにておラジオに積極的に出演している。台本も自分たちで作りのびのびと放送している。最近の放送は下記の内容で実施。



ラジオ番組の収録に挑む「子ども司書」たち

小さな司書のラジオ局(図書館) 出演: 岐阜市立中央図書館こども司書

1 秋に痩せようダイエット 出演: ぴーちゃん(司会) ともみちゃん、ちえちゃん

2 ハロウィンについて 出演: みのりちゃん(司会) かほりちゃん、みみちゃん、あやみちゃん、ひなちゃん

(3) 感想

実施からまだ 4 年目で、これからも様々な改善・発展が見込めると思うが、現状の評価としては良好のようだ。2009 年に福島県矢祭町で始まり、全国に広がっていることも、その有効性、可能性を示していると思う。

子ども司書の資格を認定された子どもたちが、自分の学校でどんな活動をしているのか、大人の学校司書と連携して、何か面白い活動ができているか質問させていただいたが、その点はこれからの課題という事であった。また、小学校、中学校を卒業した後、子ども司書たちの様子はどうか質問した。生徒会長になった子、自分の考えをしっかりと表明できるようになった子の例などを紹介いただいた。いずれにしても、一層、本に興味をもって生活するようになっていくのではないかと

想像できた。そして、きっと、80人の子ども司書の周りの子どもたちへのいい影響がたくさんあるのではないかと想像した。これから、子ども司書がもっともって増えていくであろうから、夢は膨らむ。注目していきたい。

3. 岐阜市の「みんなの森 メディアコスモス」事業について

(1) 経過

平成8年に、岐阜大学医学部および附属病院の柳戸地区への移転が決定。

平成10年に岐阜市がこの地を取得することが決定し、司町地区に3.1ha(31,000㎡)の広大な用地が確保された。

平成18年、「多様な機能が複合している、新しい時代の”つかさの町づくり“…市民と行政が協働する社会の拠点…」とする基本構想が決定。

平成21年、各分野の有識者からなる基本計画策定委員会が設置され、平成22年、パブリックコメントを経て基本計画を公表。

第1期 複合施設…つかさのまち夢プロジェクト
(中央図書館・交流センター・ギャラリー等)
第2期 行政施設(市庁舎)
第3期 市民文化ホール

資質評価型プロポーザル方式で70名の応募者の中から設計者を選定→伊東豊雄氏(建築界のノーベル賞と言われるプリツカー賞を受賞している)に決定。

平成26年建物完成

平成27年開館



(2) 概要

敷地面積 14,725㎡の広大な敷地(第2期、第3期工事分も含めると31,000㎡)に、建築面積 7,530㎡、延床面積 15,444㎡という大きな2階建て建築物である。“知の拠点”(フムフムエリア)としての市立中央図書館が2階、“絆の拠点”(ワイワイエリア)としての市民活動交流センターと多文化交流プラザ、“文化の拠点”(ドキドキエリア)としてのホールと展示ギャラリーとオープンテラスが1階に配置された複合施設で、とにかくその広さに圧倒される。建物自体も、自然との調和、自然エネルギーの活用、省エネ、室内の採光や気流制御にも配慮されている。独創性、話題性、情報発信性にも富んでいて見学者が絶えないとのことであった。



“知の拠点”（フムフムエリア）としての市立中央図書館

視察では、主に 2 階の市立中央図書館を中心に見学し、説明を受けた。

2 階部分 7,530 m² 全体に壁がほとんどなく、残体を見渡すことができ、一体感を生み出すよう工夫され、常にどこかがにぎわっている「まち」のような雰囲気である。天井は、東濃ヒノキの木製格子屋根となっており、良い香りでリラクゼーション効果を生み出している。天井から吊るされた 11 個のグローブの下で、文学、郷土、文庫、若者向け、児童向け、親子向け、レファレンス、受付、企画展示などが配置されている。グローブ上部からの自然光が柔らかく室内に拡散し、水平窓の開閉によって自然な風の流れを生み出すようになっている。

大変広いフロアなので、例えば、親子のグローブの下で、多少の子どもの声があっても気にならないようになっている。若者のグローブの近くでは、図書館職員へ寄せられた質問カードに答えるコーナーもあり（写真参照）、人気コーナーになっている。

◇施設利用状況

来館者数…15 万人（旧図書館）／年→130 万人／年（平成 29 年）

図書館新規登録者数…929 人（平成 25 年）→30,372 人（会館後 1 年）

貸出利用者の年齢層の変化…40 歳以上の割合 約 30%（平成 25 年）→54%（平成 29 年）

施設稼働率 ホール 80%、ギャラリー 92%、スタジオ（4 室全体）99%（平成 29 年実績）



仕切りがなく、低い書架、オープンな空間の図書館



（2）感想

建物全体を一つの町として捉え、町のあちらこちらに賑わいがあり、しかも互いに影響しあい、全体として調和しているような町（建物）、それが「みんなの森 メディアコスモス」の狙いである。それぞれのエリアに来館した市民が、他のエリアにもついでに足を伸ばし、知見を増やしたり、楽しんでいたりすることが多いようである。複合施設のメリットが発揮されているように思われた。利用者も順調に伸びているようである。

こうした施設を建設し、市民ぐるみで運用している岐阜市には大いに学ぶものがあると感じた。しかし、このような施設建設には、広大な用地を必要とするのも事実である。しかし、福生市においては目下のところ、そのような広い用地を見つけることは困難である。1 日も早い、横田基地の返還を願うばかりである。

岐阜市全体で中央図書館を含めて 7 館あり、全体の蔵書数は 767,000 冊とのことであった。一人当たりの図書館蔵書数は 2 冊弱で、福生市の 7.6 冊と比べて少ない。福生市はこれまで積み上げてきたこうした長所を生かしていく工夫が求められているのでないだろうか。

今、福生市も公共施設総合管理計画の中で、20%削減を掲げているが、私は市民サービスの低下につながる恐れがあると考え、長寿命化を基本に再検討し、公共施設の維持・充実を求めているところである。しかし、岐阜市の本例の様な大きな効果が認められる複合化による延べ床面積の削減が可能であれば、もちろん賛成である。